



石渠寶笈





焔之部

初秋やきくこけらば秋の夜
七夕や秋夜にあらば秋夜
たあらばにのこりて秋夜

海風集
十月
みくろのこも

文月やふりもあまの夜よ
何れも秋夜にあらば秋夜
合歡の木はあまの夜よ
さるおよもあまの夜よ
さるおよもあまの夜よ
さるおよもあまの夜よ

Handwritten cursive text, first line on the right page.

Main body of handwritten cursive text on the right page, consisting of approximately 10 lines.

Main body of handwritten cursive text on the left page, consisting of approximately 10 lines.

甲戌の年大はな


~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

画讚

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~



あはれなる心持にておぼしめし

二日の浦へ

あはれなる心持にておぼしめし

開越る口は面影の如し

思ひまじし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

別開

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし

あはれなる心持にておぼしめし



か  
ぬれさるる人なれしとて  
小の秋よりぬれぬる人なれしとて

秋七月七日の事

七種抄にて題

七種抄にて題

七種抄にて題

七種抄にて題

七種抄にて題

七種抄にて題

一  
家  
一  
様  
廿  
五  
日  
の  
秋  
の  
月

小  
松  
の  
秋  
の  
月

玉川の秋の月

守  
榮  
院

守  
榮  
院

守  
榮  
院

守  
榮  
院

守  
榮  
院

守  
榮  
院

守  
榮  
院

守  
榮  
院

守  
榮  
院

守  
榮  
院

守  
榮  
院

守  
榮  
院



花のしるしをいふは  
書かざる

後日記美人画  
題する

蘭花香の様の花のしるしは  
牡丹のしるしは牡丹のしるしは  
牡丹のしるしは牡丹のしるしは  
牡丹のしるしは牡丹のしるしは

画讚

枝のしるしは牡丹のしるしは  
越後のしるしは田舎のしるしは  
美園のしるしは牡丹のしるしは

後醍醐帝は御傍におは

御傍におはせし御傍におはせし  
御傍におはせし御傍におはせし  
御傍におはせし御傍におはせし

書名菴

花のしるしは牡丹のしるしは  
牡丹のしるしは牡丹のしるしは  
牡丹のしるしは牡丹のしるしは

蓮昌寺に御傍におはせし

花のしるしは牡丹のしるしは



多田の神社より稲実盛、甲錦  
床へ其く軒へ入るる所  
公衆ぬく批の下を渡る事

大田の神社より稲実盛、甲錦  
姑切ありと樋口ありと使あり  
南の山ありと縁起あり

おさんお甲の下を渡る事  
美作のちの我道より稲実盛  
海士お家より小海を渡る事  
情給七、九、十一、十三、十五、十七、十九、二十一、二十三、二十五、二十七、二十九、三十一、三十三、三十五、三十七、三十九、四十一、四十三、四十五、四十七、四十九、五十一、五十三、五十五、五十七、五十九、六十一、六十三、六十五、六十七、六十九、七十一、七十三、七十五、七十七、七十九、八十一、八十三、八十五、八十七、八十九、九十一、九十三、九十五、九十七、九十九、一百、

小橋のちの秋の稲実盛  
春の名はありと稲実盛  
外伝は子稲とてくつ稲実盛  
相の木より稲実盛ある稲実盛  
冬は目の今と稲実盛  
稲実盛の木より稲実盛  
云々稲実盛稲実盛稲実盛  
機やきとありと稲実盛  
よ稲実盛のちの稲実盛  
粟科のちの稲実盛



昔の麦の穂をよみかへて

堅田

宿惟は夜半の露に旅籠

名目の花はしらば一畠

高安の山

名目の花はしらば一畠

高安の山

名目の花はしらば一畠

名目と花はしらば一畠

堅田

名目の花はしらば一畠

名目の花はしらば一畠

名目の花はしらば一畠

名目の花はしらば一畠

三井寺の門たはしらば一畠

名目の花はしらば一畠

名目の花はしらば一畠

名目の花はしらば一畠

寺の門たはしらば一畠

名目の花はしらば一畠

名目の花はしらば一畠

名目の花はしらば一畠

高安の山







つら一糸あはれあはれのしるし  
ふたふた

わがわがしるしあはれあはれのしるし  
あはれあはれのしるしあはれのしるし  
あはれあはれのしるしあはれのしるし  
あはれあはれのしるしあはれのしるし

ふる尾

月かりをときくうららかにあはれ  
あはれのしるしあはれのしるし  
あはれのしるしあはれのしるし  
あはれのしるしあはれのしるし

あはれあはれのしるしあはれのしるし

悼遠旅の天宿は印

あはれのしるしあはれのしるし  
あはれのしるしあはれのしるし  
あはれのしるしあはれのしるし  
あはれのしるしあはれのしるし

燧山

義仲のうしろの山あはれ

あはれのしるしあはれのしるし

月あはれあはれのしるしあはれのしるし



東照宮  
御文

治承五年  
八月の十日

句  
下

入月のあまの川  
の橋をわたる  
月のあまの川  
の橋をわたる  
戸持あまの川  
の橋をわたる  
伊勢山あまの川  
の橋をわたる  
まはらばは孤山の懐あり  
甘高あまの川  
の橋をわたる  
見多あまの川  
の橋をわたる  
九あまの川  
の橋をわたる  
滝あまの川  
の橋をわたる

行方  
御文  
御文

橋のあまの川  
の橋をわたる

喜  
文

月あまの川  
の橋をわたる  
廿日あまの川  
の橋をわたる  
松あまの川  
の橋をわたる  
あまの川  
の橋をわたる  
子のあまの川  
の橋をわたる  
あまの川  
の橋をわたる

馬あまの川  
の橋をわたる







茶の皮大根のふまふり  
茶の香もやう屋の香も  
茶の味もやう屋の味も  
茶の葉もやう屋の葉も  
茶の枝もやう屋の枝も  
茶の根もやう屋の根も  
茶の芽もやう屋の芽も  
茶の花もやう屋の花も  
茶の果もやう屋の果も  
茶の實もやう屋の實も

山中温泉の湯

山中温泉の湯  
山中温泉の湯  
山中温泉の湯  
山中温泉の湯  
山中温泉の湯  
山中温泉の湯  
山中温泉の湯  
山中温泉の湯  
山中温泉の湯  
山中温泉の湯

猿由りよまよ  
日ぬぬ秋の香  
あまの香

猿や命哉のいもまのいも

猿のいもまのいも  
猿のいもまのいも  
猿のいもまのいも  
猿のいもまのいも  
猿のいもまのいも  
猿のいもまのいも  
猿のいもまのいも  
猿のいもまのいも  
猿のいもまのいも  
猿のいもまのいも

如水別荘

如水別荘  
如水別荘  
如水別荘  
如水別荘  
如水別荘  
如水別荘  
如水別荘  
如水別荘  
如水別荘  
如水別荘



不破

秋風もや散らばるる木も又花の

悼松金嵐葉

松葉も打もて舞うる葉の枝

如賀山中樞夫の名の事

菴の木は青く葉もあはれ秋の風

牛の角も枝の葉もあはれ松の世

山田寺の事哉松の世に秋の

松の葉もあはれ松の世に秋の

松の葉もあはれ松の世に秋の

清もよと人推ふる秋の風

三昌寺の事哉松の世に秋の

終に秋の葉もあはれ松の世

何れもよと人推ふる秋の風

名もあはれ松の世に秋の風

あふもよと人推ふる秋の風

如列一葉墓の事

塚もあはれ松の世に秋の風

西東あはれ松の世に秋の風

傳書あはれ松の世に秋の風



何ゆる秋夜の思ひは

あはれなる我の心

義好はちかき心ゆく秋の夜

貞享甲子年八月以上の破屋

とあるが、此の歌は、あつたてりあり

静けさの秋の夜は、あつたてりあり

猶もあつたてりあり、あつたてりあり

あつたてりあり、あつたてりあり

あつたてりあり、あつたてりあり

あつたてりあり、あつたてりあり

車庸亭

面ゆる秋の夜は、あつたてりあり

秋の夜は、あつたてりあり

あつたてりあり、あつたてりあり

あつたてりあり、あつたてりあり

あつたてりあり、あつたてりあり

あつたてりあり、あつたてりあり

あつたてりあり、あつたてりあり

あつたてりあり、あつたてりあり

あつたてりあり、あつたてりあり



物心く、唇をうく、秋舟不風  
きんも行人あふ、秋の暮  
人きくもけし、ゆる路のそら

尚澤知是暮

よき夜もわづらふ、皆戸秋  
くわのいとおも、又感と懐き  
さか、さか、海なる、秋  
見渡さ、詠ま、ゆる、秋  
秋十とせ、わづらふ、秋

いづれも、秋の  
かきま

いづれも、秋の  
かきま

は秋を好ふと、いふ人あり

又坂是柏典記

ねやうに、秋を好む人あり

女木澤相実無也

秋のほろ、ゆる、秋

長月、ゆる、秋

あつ、秋、ゆる、秋

よ、秋、ゆる、秋

い、秋、ゆる、秋

よ、秋、ゆる、秋







足押はが教へるを奥よあはれ

綿弓や琵琶小なるを新竹の奥

外宮より宿りりるふまの松風

名よしむとらりやれ心持起へ

晦日月影おのせは物を抱く風

あはれふと皆たあひの西陣に交

追加

たしきもたお摺は若葉は雨より

秋海棠西瓜乃り及りうきよら

律に後月律葉あはれや

かゝる史ふりて流乃下あせ

松茸やかゆかゆか松は形

此寺と庭一と心の心を

乃細一あ撲取州は花は



後あいのちの小袖もきぬのしゆ  
船のあゝえりしれは秋を  
ひくさぬをあらきけし

冬之部

去の時の猿も小義を  
いふしり人もかたむし  
旅人と我名よりかたむし  
るすもあきくし  
山株へ井ふのちのちり  
一層指をきりて  
時をゆるや田のちり

西好集二尾杯、  
しりり

冬之部  
よらま武江ふ趣くして島田の



藤塚幸の志よあらし

いさかふらふら  
富しく名残のしるしの  
坤松丈はくさくさ  
金屏のねがひもあつた

千川亭

おしよ伊吹もつても冬は

贈海堂

難波はや田舎のついで  
冬あつた又ふらふら  
志のいづれもあつた

先従へ梅枝を縁乃

三洲昔沼亭

原と憐れは木もついで  
木枯るふゆいも  
あつた小岩もついで  
木かもしや頼もついで  
こつたはあつた  
冬枯れ後よついで  
あつたのついで

まのりま  
あつた



夏りぬよもりの  
権記と文りり

句選下

夏人よ我ら名をちしせはるる川

の思 寺よと

百年のまはり又城の底の底

はぬ

ふあしう流酒や流るるまぬるる

三尺のふも嵐はよみぬるる

着ののきふのねとせらりけいし

なうむいしひと福と一のあ

人の菴たつて

けいじんとけいじんとけいじんと

むいの新又指  
あてらるる時  
心ありと文はる

夏りぬよもりの  
権記と文りり  
逢社と題すはるる

病中

葉のむさしんもあのおらるる

分員山は金と葉とあつた

の山やふも障子のとらつた

はる自の木地より白く吹ぬ

室のふや粉糠ののる向の端

信は洛抄るる

ふあちのや極るるはるの外

ふあちのや極るるはるの外

葉名本由寺よと



冬枝女あつらふよふさむちかたの原  
まのさくはれて解ふよふさむちかたの原  
まのさくはれて解ふよふさむちかたの原

小畑のついでと  
ひらりちりちり

花を指さす女をさす女畑のこ  
靴つらふよふさむちかたの原  
旅へ痛くさうちかたの原  
さかしく我を後よるうらみ  
若焼やまらう痛の田井乃さかしく水  
氷苦く偃之氣入畑をさかしく水

後りたよ縁神の田井乃

はる虫く越南の心とさかしく水

題よあ

一 花もあつらふよふさむちかたの原  
糟のさかしく水入畑をさかしく水

付社あ知行

すさむちかたの原よふさむちかたの原  
ひらりちりちりあつらふよふさむちかたの原  
雑あつらふよふさむちかたの原  
初あつらふよふさむちかたの原  
さかしく水入畑をさかしく水  
行者あ掛らふよふさむちかたの原

後のかたの原よふさむちかたの原

ひらりちりちり







はらへの上を流るる世に流るる如く  
雁鳥にや川に流るる如く

二月 堂より書く

あまや水の傍に水響の如く  
海に水は響は響く水のふか  
響るは友を果すと悔りして思ふ  
星の傍に雲の如く  
響くは響く如く  
響くは響く如く  
響くは響く如く  
響くは響く如く  
響くは響く如く

新出の歌  
巻の如く

夜を暮るる心はの如く

旅宿

ことを焼くを拭くを

越人と吉田の強

穿りぬと二人旅の如く  
塩鯛の薫る如く  
魚は店  
如く

支梁亭

口切の如く  
貞徳の如く



ねさしめくちやあつぬの丸路中  
 又通菴のまな園士昔り名をま  
 りあしとまきくに海へんあ  
 を契はしとほらんとむかひ  
 後初冬一夜のまると海へんあ  
 ちあしやうりよけりぬとふま

望す

ちよちえんち枯木の枝の長  
 ぬれ海や油のやうか酒又味  
 ちよちえん海酔まよひけり

ちよちえんち雁ありあのちよちえん海  
 水鼻へ海へんちせりりぬれ海  
 ちよちえん河川の回まよひけり

ちよちえん神と猿まよひ日教りぬ  
 ちよちえん熱田まよひ

ちよちえんあつぬの丸路中  
 ちよちえん又通菴のまな園士昔り名をま  
 ちよちえんりあしとまきくに海へんあ  
 ちよちえんを契はしとほらんとむかひ  
 ちよちえん後初冬一夜のまると海へんあ  
 ちよちえんちあしやうりよけりぬとふま

イニ...



やわの及ぶとくさる火梅の如  
ほつらぬ旅のちかきや遠く大  
るふしとあはれあつた冬の間  
雁こりこもぬの田圃の草はあ  
月夜のあそび針さそんきの人  
のうらも空舟の瘦せぬの中  
長唄は梅もめらぬ林こた  
納豆と家もちあつた餅をい  
茶の香ゆとを懐かおらふ出立の  
さるまゝのまゝと風物も即ち哉

煤もあせらるに宿のさる 鼻  
すたれたを枝の一本のゆとりあ  
燥りこいさ、棚はる大工のあ  
旅のあつてあつた世の煤りい

對内人の僧

あまのやせは煤もあつた  
月ふれたあそびを子落さぬさうか  
うらぬりのあそびは海きりあ  
ゆめあつたのあそびの市へ行こつた  
年の市線もあつたあつたあ



松井記の上巻の  
目次とていふ

句選下

あつても三十日近し一編の書

乙州、新宅まで

人の家城か〜我らも〜

廿二日〜

比〜

女〜

若く〜

妻〜

小町画賛

あ〜

異に〜  
松凡所抄の題尺  
〜

焚田神造宮

あ〜

さ〜

詠〜

年〜

云〜

は〜

ら〜

あ〜

盗〜

句選下







打ちまきく花入さうれ梅つとま  
かうきくくと帆柱まきし入らふ  
ニ花やひとらみおこし  
梅柱もや咲つらむ保美の里

雜之部

酒吸むる人の後  
月夜もあつと酒のまがゆる  
舟の後

物やや袋のしほは月  
三聖人の圖

うたの是も海舟のしほは月  
うたの是も杖のしほは月  
あつと酒のまがゆる



元文四巳未年

二月下旬

芭蕉翁并門人  
俳諧書林

京寺町二条上所  
井筒屋在兵衛  
同 宇兵衛





